

訳語からみた「佛般泥洹經」と「般泥洹經」の訳経者（福島）

訳語からみた「佛般泥洹經」と 「般泥洹經」の訳経者

福 島 謙 應

I. 序 論

本論は筆者の大学卒業論文の主に後半部分を中心に纏め直したものである。纏め直した論文の主テーマは、所謂小乗「涅槃經典」といわれている「佛般泥洹經」（大正新修大藏經、以「大正藏」と略 第一卷）、「般泥洹經」（同）、「遊行經」（同・長阿含經の第二～第四卷部分）を夫々の經典に使われている用語を比較検討することにより、「遊行經」を除く二經典の訳経者を推定するという内容である。

この論文を作成するに当たり、大蔵出版の仏典講座『遊行經』（上・下）を「遊行經」と「般泥洹經」の日本語訳、平河出版社の現代語訳『阿含經』1を「遊行經」の日本語訳として参考にした。尚、「佛般泥洹經」の日本語訳は探すことが出来ず、筆者自身の訳による。

II. 小乗「涅槃經典」の訳経者

「涅槃經典」の訳経者は「遊行經」については中国、後秦の弘始年間（西暦 399～416）に佛陀耶舎（ぶつだやしや）と竺佛念（じくぶつねん）が共訳した、ということで異論はないだろう。しかし「佛般泥洹經」と「般泥洹經」については訳経者、訳年代の新旧について先学の間で各種異論があり、

訳語からみた「佛般泥洹經」と「般泥洹經」の訳経者（福島）

筆者が調べた限りでは表1の通りである。

表1

	「佛般泥洹經」	「般泥洹經」	論文名（「著書名」）
	白法祖	失訳	「大正新修大藏經」
石川海浄	先訳	後訳	大般涅槃經三卷本の在り方に就いて
宇井伯寿	後訳	支謙	『般泥洹經』二卷の訳者は支謙か
中村 元	後訳	先訳	「仏典講座（遊行經 上下）」
岩松浅夫	支謙	竺法護	涅槃經小本の翻訳者
吉本信行	先訳	後訳	筏の譬え

注1) 先訳、後訳とは漢文經典に訳出された時間的前後関係を言う。

注2) 訳経者とされている三者の活躍年代は、支謙、白法祖、竺法護の順、白法祖・竺法護は一部重なる可能性あり。

表1から得られる情報により、本論では、白法祖、支謙、竺法護の三者に絞って、この二經典を訳経した可能性があるのかどうかについて検討を進めていきたい。検討の中心は、訳者・訳出年代の確定している「遊行經」を含めた三經典の用語の使われ方を調べ、それらが検討対象としている三者の用語の使い方と一致するのを見極めていきたい。

Ⅲ. 「佛般泥洹經」と「般泥洹經」の特徴

検討を始める前に、簡単にこの二經典の特徴を述べる。この經典は佛陀の涅槃前後の出来事を記録した經典といわれているが、もちろん文字として記録されたのは佛陀が涅槃に入った時代よりずっと下り、紀元前後に記録され編纂されたと考えられている。その經典が中国に渡り漢語の經典に訳出されたのは、三世紀頃と推定される。どちらが先に訳出された經典であるかは、これからの検討課題であるが、特徴的なことは両經典は非常によく似た表現・用語を使用していることである。その例を一つ表2にあげる。

これは摩竭国の大臣雨舎が耆闍崛山に佛陀を尋ねる場面であるが、よく類似している。

訳語からみた「佛般泥洹經」と「般泥洹經」の訳経者（福島）

表 2

160	佛般泥洹經	176	般泥洹經	11	遊行經
c05	時佛坐。阿難	a24	時賢者阿難。	a24	爾時阿難
	<u>從後扇佛。</u>	a25	<u>從後扇佛。</u>		在至尊後執扇扇佛。
c06	佛告阿難。		佛言阿難。	a25	佛告阿難。
	汝寧聞越祇國人。		汝寧不聞越祇國人。		汝聞跋祇國人
	<u>數相聚會。</u>		<u>數相聚會。</u>		<u>數相聚會。</u>
c07	講議政事。	a26	講論政事。		講議正事不。
	修備自守不。		修備自守。		
	<u>對曰。</u>		<u>對曰。</u>	a26	答曰聞之。
	<u>聞其數相聚會。</u>		<u>聞其數相聚會。</u>		佛告阿難。
c08	講議政事。	a27	講論政事。		若能爾者。
	<u>修備自守。</u>		<u>修備自守。</u>		長幼和順傳轉更增盛。
	<u>佛言如是。</u>		<u>佛言如是。</u>	a27	其國久安無能侵損。
	<u>彼為不衰。</u>	a28	<u>彼為不衰。</u>		
c09	<u>汝聞越祇。</u>		<u>汝聞越祇。</u>		阿難。汝聞跋祇國人
	<u>君臣常和。</u>		<u>君臣常和。</u>	a28	君臣和順
	<u>所任忠良。</u>		<u>所任忠良。</u>		上下相敬不。
	轉相承用不。	a29	轉相承用。		
c10	<u>對曰。</u>		<u>對曰。</u>		答曰聞之。
	<u>聞其君臣常和。</u>		<u>聞其君臣常和。</u>	a29	阿難。
	<u>所任忠良。</u>		<u>所任忠良。</u>		若能爾者。
	<u>轉相承用。</u>	b01	<u>轉相承用。</u>		長幼和順轉更增盛。

注記：表中の数字「160」、「176」、「11」はそれぞれ大正蔵の当該頁である。

また「c05」などとあるのは、C段の5行目を意味する。

波線部同一箇所。

両經典を詳細に調べてみると、訳出文の一致する部分が全体のおよそ16～18%にのぼる。そのほか両經典の出だしの部分（「佛般泥洹經」160,b05～b12）、大迦葉が佛陀の徳を称えて偈を述べる部分（「佛般泥洹經」170,a08～b07）は

訳語からみた「佛般泥洹経」と「般泥洹経」の訳経者（福島）

ほとんど同じ経文である。

さらに特殊な用語、例えば鶴山（一般には耆闍崛山と言う）などが一致することを考えると、先訳を後訳が真似たと思われる。宇井説では「般泥洹経」（宇井説では支謙訳）を「佛般泥洹経」の訳者が真似たと言ひ、岩松説では、「佛般泥洹経」（岩松説では支謙訳）を「般泥洹経」が真似たとなっている。筆者としては、支謙、白法祖、竺法護の三者に絞って、彼らのうち誰がこの二つの涅槃経典を訳したのか、誰が訳さなかったのかを検討していく。

Ⅳ. 支謙、白法祖、竺法護の訳出経典

ここでは「佛般泥洹経」と「般泥洹経」に使用されている用語が、先哲によって訳経者として名前を挙げられた支謙、白法祖、竺法護の訳出した経典とどの程度一致するかにより、二経典の訳経者を推定しようとするものである。それにはまず三者の訳出経典を特定する必要がある。特定のために参考にした文献は「大正新修大蔵経」、「出三蔵記集」、「歴代三宝紀」の三典である。この三典籍を比較検討して各訳経者の訳出経典を特定し、涅槃二経典と比較検討した。

1. 支謙の訳出経典

支謙訳とされる経典は「大正蔵」に五一経典が収録されており、「出三蔵記集」には三六経典が収録されている。「大正蔵」と「出三蔵記集」の両方に共通して収録されているものは二三経典である。図示すると図1のようになる。この二三経典を支謙訳とした。

図1

「大正蔵」に支謙訳経典として収録51						注) A：新集統撰失訳雑録第一 B：新集安工失訳経録第二 C：新集安工涼土異経録第三 D：條新撰目錄闕経 不明で対応する経典が見つからない 「大正蔵」に未収録13
「出三蔵記集」では支謙訳でない28 (「出三蔵記集」に記載の訳出者)						
竺法護	A	B	C	D	不明	
4	11	9	1	1	2	
注						「大正蔵」と「出三蔵記集」に共通する収録23
						「出三蔵記集」に支謙訳経典として収録36

訳語からみた「佛般泥洹経」と「般泥洹経」の訳経者（福島）

2. 白法祖の訳出經典

白法祖訳とされる經典は「大正蔵」に五經典が収録されているが、「出三蔵記集」にはわずかに「惟逮菩薩經一卷」が載っているのみである。しかも「今闕」となっており、確認することが出来ない。

「歴代三宝紀」を調べてみると二三經典が録っていた。

「大正蔵」と「出三蔵記集」の対応を調べてみると、図2のようになる。両方に収録されている經典はなかった。「大正蔵」の「佛般泥洹経」に対応するのではないかと考えられる「〇〇泥洹経」、もしくは「〇〇涅槃経」なるものが「出三蔵記集」には合計8經典あるが、いずれも白法祖訳にはなっていない。

図2

「大正蔵」に白法祖訳經典として収録5			「大正蔵」に未収録録1
（「出三蔵記集」に記載の訳出者）			
安陽	A	対応とれず	「出三蔵記集」に白法祖訳經典として収録1
1	3	1	

A：新集続撰失訳雜經典

次に「大正蔵」と「歴代三宝紀」の対応を調べてみると図3のようになる。

図3

「大正蔵」に白法祖訳經典として収録5		「大正蔵」に未収録録20
「歴代三宝紀」との対応とれず	「大正蔵」 「歴代三宝紀」 に共通する収録3	
2		「歴代三宝紀」に白法祖訳經典として収録23

「大正蔵」と「歴代三宝紀」の対応では「佛般泥洹経」を含めて三經典が両方に収録されているが、この三經典を「出三蔵記集」で調べてみると「佛般泥洹経」は対応がとれず、残りの二經典は別の訳経者（安陽）と失訳となっ

訳語からみた「佛般泥洹經」と「般泥洹經」の訳経者（福島）

ている。結局、白法祖訳出と確実に言えるものはないのではないかと考えられる。

それでは用語の対応を検討するときの対象経典がなくなるので、「大正蔵」に収録されている5経典のうち、「歴代三宝紀」と対応の取れる三経典を検討対象とした。

尚、参考までに「出三蔵記集」と「歴代三宝紀」の関係をとってみると図4のようになる。

図4

「歴代三宝紀」に白法祖訳経典として収録23				
「出三蔵記集」では白法祖訳でない経典22 (「出三蔵記集」に記載の訳出者)				「歴代三宝紀」 「出三蔵記集」 の両方に収録1
竺法護	別人	失訳	対応とれず	
3	5	9	5	
「出三蔵記集」に白法祖訳経典として収録1				

一般に「歴代三宝紀」の記載内容は正確さに欠けると言われているが、「大正蔵」、「出三蔵記集」との対応状況（一致するものが少ない）からもその一端が窺われる。

3. 竺法護の訳出経典

竺法護が訳出したとされる経典は「大正蔵」に九〇経典が収録されている。「出三蔵記集」には一五九経典が収録され、両典籍に共通して収録されている経典は六八経典にのぼる。「大正蔵」と「出三蔵記集」の対応を図5に示す。

図5

「大正蔵」に竺法護訳経典として収録90				
「出三蔵記集」では竺法護訳でない経典2				「大正蔵」 「出三蔵記集」 の両方に収録68
鳩摩羅什	A	B	対応とれず	
1	16	2	3	
注) A：新集続撰失訳雑経録第一 B：新集安工失訳経録第二				「大正蔵」に未収録91
「出三蔵記集」に竺法護訳経典として収録159				

訳語からみた「佛般泥洹経」と「般泥洹経」の訳経者（福島）

竺法護は多数の経典を訳出している事が二つの典籍の訳出經典数からもわかる。「大正蔵」と「出三蔵記集」の両方に収録されている經典六八經典を検討対象とする。

V. 用語の使い方の調査方法

用語の使い方の調査は、各經典における特徴的な用語の使用頻度を調べるのであるが、經典の大きさがまちまちなので、次のように設定した。

- 1) 經典の大きさ……………便宜的に「大正蔵」の行数で表現する。
- 2) 基準行数の設定……………「佛般泥洹経」と「般泥洹経」の平均行数1340行を基準行数とする。
- 3) 相対経量……………經典の行数を基準行数で割ったもの。經典の相対的な大きさが出る。
- 4) 用語の使用頻度……………各經典あるいは經典群ごとの出現回数。
- 5) 用語の換算使用頻度…用語の使用頻度を相対経量で割ったもの。「佛般泥洹経」、「般泥洹経」に於ける使用頻度（=換算使用頻度）と、検討対象經典（群）の換算使用頻度を比較し、訳出者の特徴が出ているかを検討する。

表に纏めると表3の様になる。

表3

	調査經典		参考經典	比較検討經典		
	佛般泥洹経	般泥洹経	遊行経	支謙訳出	白法祖訳出	竺法護訳出
經典数	1	1	1	22	3	68
総経量（行）	1,351	1,328	1,679	11,564	320	84,313
相対経量（倍）	1.00	1.00	1.25	8.63	0.24	62.92
「聚」の使用頻度	52	6	4	40	9	208
同換算使用頻度	52.0	6.0	3.2	4.6	37.7	3.3

訳語からみた「佛般泥洹經」と「般泥洹經」の訳経者（福島）

この方式で「聚」（村、集落の意味）の使われ方を調べてみると、時代の変遷による違い、訳出者による違い、漢訳に用いた原典の単語による違い等を考察することが出来る。

Ⅵ. 各種用語の使用頻度調査

1. 挨拶用語

挨拶用語は出会いの時と、別れの時があるが、涅槃三經典共に定型化された表現が多い。

1) 出会いの時の挨拶用語

表 4

	佛般泥洹經	般泥洹經	支謙訳出		白法祖訳出		竺法護訳出	
稽首佛足	6	5	16	0.98			82	1.19
稽首畢一面住		5	1	0.06			1	0.01
稽首畢一面座	1	7	1	0.06				
頭面著佛足	3		18	1.11	1	2.63	1	0.01
頭面着地	2		5	0.31	1	2.63	5	0.07
佛作禮	4		45	2.77	4	10.53		
佛首作禮	1	3	2	0.12				

左側：使用頻度 右側：換算使用頻度

出会いの挨拶用語を検討すると表4のようになる。

「佛般泥洹經」と「般泥洹經」では挨拶用語の使い方がやや違うようである。稽首佛足は共通に使われているが、頭面・・は「佛般泥洹經」で稽首畢一面住（座）は「般泥洹經」でのみ使われている。「佛般泥洹經」での使い方は支謙と白法祖に近い様に感じる。「般泥洹經」使われている「稽首畢・・」はこの三者は殆ど使っていない。

2) 別れの時の挨拶用語

別れの時の挨拶用語を纏めると表5のようになる。

訳語からみた「佛般泥洹經」と「般泥洹經」の訳経者（福島）

表 5

	佛般泥洹經	般泥洹經	遊行經		支謙訳出		白法祖訳出		竺法護訳出	
佛作禮而去	3				9	0.55	1	2.63		
遶佛三匝			6	4.79	20	1.23			8	0.12
遶三匝		3			4	0.25			3	0.04
繞佛三匝	2	1			20	1.23	1	2.63	18	0.26
繞三匝		2			2	0.12			17	0.25

左側：使用頻度 右側：換算使用頻度

涅槃二經典の双方に通用するように感じる。

2. 人名用語

「佛般泥洹經」、「般泥洹經」の中で人名用語は約九〇語使用されている。

両經典の中に出てくる主な人名は表 6 の通りである。

表 6

佛般泥洹經			般泥洹經			佛般泥洹經			般泥洹經		
160	b 09	阿闍世	176	a 06	阿闍世	169	a 14	優和洹			
160	b 12	雨舍	176	a 09	雨舍	170	a 18	須達			
160	c 05	阿難	176	a 24	阿難	171	b 06	阿晨	187	a 04	阿晨
163	a 25	玄鳥	178	b 16	玄黒	171	a 18	須拔	187	b 06	須跋
163	a 25	時仙	178	b 16	時仙	171	c 24	故亀	187	b 21	古亀
163	a 25	初動	178	b 16	初動	171	c 25	無先	187	b 22	無失
163	a 25	式賢	178	b 16	或震	171	c 25	志行	187	b 22	志行
163	a 25	淑賢	178	b 16	淑良	171	c 25	白鷺子	187	b 22	白鷺子
163	a 25	快賢	178	b 16	快賢	171	c 25	延寿	187	b 22	延寿
163	a 25	伯宗	178	b 17	伯宗	171	c 26	計金樊	187	b 23	計金樊
163	a 25	兼尊	178	b 17	兼篤	171	c 26	多積願	187	b 23	多積願
163	a 25	德舉	178	b 17	德稍	171	c 26	尼健子	187	b 23	尼健子
163	a 25	上淨	178	b 17	淨高	172	c 28	阿那律	188	c 27	阿那律
163	b 29	奈女	178	c 24	奈女	173	c 13	大迦葉	189	b 11	大迦葉
164	a 13	賽自	179	b 16	並饗	173	c 17	優為	189	b 13	阿夷維
167	c 11	淳	183	a 29	淳	174	c 25	須達	190	c 21	拘夷
168	a 26	胞毘	183	c 11	福闍	175	a 10	屯屈	190	b 03	毛蹶
168	b 01	羅迦羅	183	c 14	力藍	175	a 20	桓達	190	b 27	温達
168	c 11	栴檀				175	a 25	迦梅典延			

訳語からみた「佛般泥洹經」と「般泥洹經」の訳経者（福島）

これらの人名が原典から訳出するときに意識をしたのか、音訳したのかを調べたのが表7である。

「佛般泥洹經」、「般泥洹經」

共に意識が約60%前後である。

両經典の音訳の人名の特徴を見てみると、阿難、大迦葉のように既に中国の佛教界で名前が知られていたと考え

られるものが多く、意識のものは今回の訳出に際して新しく考えられたもののように思える。「遊行經」になると意識が10%以下と少なくなっている。訳者の訳出能力も当然考えられるが、それよりも意識する意義を感じなくなっていったのではないだろうか。それは時代の流れ、あるいは仏教經典訳出の熟練度が進んだことによる学習効果といえるであろう。人名の固有名詞に就いて、訳出者の用語使用状況を調べてもあまり意味がないかもしれないが、一つだけ注目すべき用語がある。それは「阿難」である。

涅槃二經典では「阿難」、「賢者阿難」、「比丘阿難」の三通りの使われ方がされている。

涅槃二經典と訳経者三人の使用状況を整理したものが表8である。

「佛般泥洹經」は「賢者阿難」と言う呼び方を殆どしていないが、「般泥洹經」

表8

	佛般泥洹經		般泥洹經		支謙		白法祖		竺法護	
	使用頻度	使用比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率
阿難	178	98.3	125	74.4	301	95.7	41	56.1	876	83.9
賢者阿難	1	0.6	32	25.6	13	4.3	18	43.9	141	16.1
比丘阿難	2	1.1								

は四分の一が「賢者阿難」である。訳出者の方では白法祖が四割以上を「賢者阿難」と呼んでいる。この用語に関しては、「佛般泥洹經」は白法祖訳とは言えないという根拠に乏しいのではないだろうか。

3. 地名用語

地名の用語は涅槃二經典共に多数出てくるが、「鶴山（耆闍崛山）」と「聚、邑、村」について比較検討してみたい。参考までに涅槃三經典に於ける山名について整理したものを表9に示す。

1) 「鶴山」、「耆闍崛山」について

佛陀が晩年に居住し、法を説いたといわれる「鶴山」、「耆闍崛山」の使われ方を調べてみると表9のようになる。

「佛般泥洹經」と「般泥洹經」は「鶴山」を使い、訳出が約100年後年の表9

	佛般泥洹經	般泥洹經	遊行經	支謙		白法祖		竺法護	
				頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率
鶴山	3	3		2	0.1	1	2.6		
耆闍崛山			3	7	0.4			16	0.2

「遊行經」は「耆闍崛山」を使っている。意識から音訳へ時代的変換を経ているようである。訳経者を見ると、竺法護は全て「耆闍崛山」である。「大正蔵」に収録されている一五六三の經典、律、論等を調査した結果「鶴山」の用語が出てくる經典は涅槃二經典を除いては表10の四經典のみであり、何れも胡訳と称される經典であり、古い訳経ほど音訳の「耆闍崛山」でなく、意訳の「鶴山」が用いられていたことがわかる。

筆者は支謙が「大明度經」の中で「鷄山」として使用している例を発見した。調べた結果、「鷄山」の使用例は「大正蔵」の中では他にない。恐らく、本人もしくは後世の写経者が「鶴山」を誤って書いたと思われる。これを「鶴山」とすると「鶴山」の使用例は、「佛般泥洹經」と「般泥洹經」を除くと「大正蔵」収集の經典では五例と言うことになる。五例の内二例が支謙訳で竺法護の使用例は無かった。

2) 「聚」、「邑」、「村」について

「聚」、「邑」、「村」は、「國」が王国の領土を意味したのに対し、殆ど集

訳語からみた「佛般泥洹經」と「般泥洹經」の訳経者（福島）

表10

卷	頁	段・行	經典名	訳出者	經文
3	1	a 04	六度集經	吳康居國沙門康僧會	一時佛在王舍國鷄山中。
14	819	b 28	申日兒本經	宋天竺三藏求那跋陀羅	一時佛在王舍國止鷄山中。
14	779	a 07	佛說菩薩逝經	西晋沙門白法祖譯	佛在鷄山中。
14	803	a 09	佛說苾芻沙王五願經	吳月支國居士支謙譯	一時佛在王舍國鷄山中。

落としての呼び方である。

「大漢和辞典」で用語の意味を調べたところ、次のようであった。

「聚」：①集める、集まる、集まり ②むら、さと ③人の集まる所

「邑」：①みやこ ②むら、さと ③知行所 ④行政区画

「村」：①むら、いなか

使用されていた年代、用例の新旧は残っていなかった。ニュアンスとしては「聚」は自然発生的な集落、「邑」は行政単位として認められた集落、「村」は「邑」の変化していった用語と定義されるだろう。

恐らく用語としての古さは、「聚」、「邑」、「村」の順ではないだろうか。訳出に際しては訳出者の文化的背景が訳出の仕方に現れていると考えられる。これらの用語の使用状況は表11を参照していただきたい。

表11：「聚」、「邑」、「村」の使用状況

	佛般泥洹經	般泥洹經	遊行經	支謙		白法祖		竺法護	
				頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率
聚	52	6	4	98	6.0	9	23.7	233	3.4
邑	1	15		21	1.3			100	1.5
村			22	3	0.2			23	0.3

支謙と竺法護はほぼ同じような訳語の使い方をしていると考えられる。

4) 佛、神、天の呼称

「佛」、「世尊」、「如来」等の呼称を表12に纏めた。「佛般泥洹經」が「如来」の用語を一度も使用していない事が特徴的である。支謙、白法祖、竺法護共に「如来」の用語を使っている。

訳語からみた「佛般泥洹經」と「般泥洹經」の訳経者（福島）

佛、世尊、如来のサンスクリット語表現は夫々 ‘buddha’、‘bhagavanta’、‘tathāgata’ である。

表12

	佛般 泥洹經	般泥 洹經	遊行經		支謙		白法祖		竺法護	
			頻度	換算	頻度	換算	頻度	換算	頻度	換算
佛	515	400	350	279.3	4,903	301.7	136	358.0	14,570	212.3
世尊	22	6	138	110.1	524	32.2	15	39.5	2,411	35.1
如来		7	96	76.6	450	27.7	10	26.3	4,402	64.1
釈迦					3	0.2			7	0.1
釈迦文	2				17	1.0			74	1.1
釈迦牟尼					13	0.8			3	0.0
瞿曇		4			61	3.8			37	0.5
佛陀					6	0.4			2	0.0

「佛般泥洹經」の原典が何語で書かれていたかは判らないが、原典が佛の表現を区別していたことは間違いないだろう。原典の表現に「如来」を意味する tathāgata がなかった可能性も考えられる。

佛の表現が時代と共にどう変わったかを見るために、大般涅槃經の訳出者とされる「法顯」、「遊行經」の訳出者の「求那跋陀羅」を加えて、「佛、世尊、如来」の使用状況を調べてみた。

表13がその一覧表である。「佛般泥洹經」とほぼ同じ經典の大きさにそろえて出現回数を表しているので、単純に比較してもらえればよい。經典によって出現回数は当然違うが、ほぼ300～500回の出現である。後の時代になるほど「佛」の表現が減り、「如来」が増えているようである。「世尊」はほぼ同じ比率で使われている。「佛般泥洹經」の原典の成立はこのことから古い時代に属すと考えてよい。訳出者の「世尊、如来」の使用状況を見ると、支謙が16.6%、白法祖が15.5%、竺法護が31.9%である。竺法護の使用頻度が他に勝っている。

訳語からみた「佛般泥洹經」と「般泥洹經」の訳経者（福島）

表13

	支謙			白法祖			竺法護			法顕			求那跋陀羅		
	頻度	換算	比率	頻度	換算	比率	頻度	換算	比率	頻度	換算	比率	頻度	換算	比率
佛	4,903	301.7	83.4	136	358.0	84.5	14,570	212.3	68.1	634	186.6	38.4	1,733	255.2	59.9
世尊	524	32.2	8.9	15	39.5	9.3	2,411	35.1	11.3	259	76.2	15.7	570	83.9	19.7
如来	450	27.7	7.7	10	26.3	6.2	4,402	64.1	20.6	756	222.5	45.8	588	86.6	20.3
合計	5,877	361.7	100.0	161	423.9	100.0	21,383	311.6	100.0	1,649	485.3	100.0	2,891	425.8	100.0

次に「轉輪（聖）王」、「飛行皇帝」の表現を表14に見てみると、「佛般泥洹經」は「飛行皇帝」を使用し、「般泥洹經」は「轉輪聖王」を使用している。「遊行經」も「轉輪聖王」のみを使用している。原典の表現が異なるのか、訳し方が異なるのか判断できないが、両方の訳語を使用しているのは支謙だけである。

表14

	『佛般泥洹經』	『般泥洹經』	「遊行經」		支謙		白法祖		竺法護	
			頻度	換算	頻度	換算	頻度	換算	頻度	換算
轉輪(聖)王		9	17		15	0.9			30	0.4
飛行皇帝	13				5	0.3				

5) 四向四果

「佛般泥洹經」における四向四果の用語は三回出現する。四向四果に関する用語は現在では、「預流、一來、不還、阿羅漢」が一般的であるが、涅槃三經典では表15の様な使い方をしている。

宇井伯寿氏は「溝 表15

港」、「頻來」、「不還」、「應眞」が支謙独特の訳語であり、これを『般泥洹經』の支謙訳出の根拠の一つとしている。

現在の四向四果用語	『佛般泥洹經』	『般泥洹經』	「遊行經」
預流	溝港	溝港	須陀洹
一來	頻來	頻來	頻來・須陀含
不還	不還	不還	阿那含
阿羅漢	阿羅漢・應眞	應眞	阿羅漢

（『般泥洹經』二巻の訳者は支謙）か。『訳経史研究』、1971年、岩波書店）

訳語からみた「佛般泥洹經」と「般泥洹經」の訳経者（福島）

涅槃經典、訳出者による四向四果用語の使用状況は表16の通りである。

表16

	『佛般泥洹經』	『般泥洹經』	『遊行經』		支謙			白法祖			竺法護			求那跋陀羅		
			頻度	換算	經典	頻度	換算	經典	頻度	換算	經典	頻度	換算	經典	頻度	換算
溝港	3	3			4	31	3.6									
須陀洹			4	3.2	4	7	0.8				10	57	12.7	2	2	0.4
頻来	2	2	1	0.8	3	21	2.4				1	1	0.2			
斯舍陀			2	1.6	3	7	0.8				8	56	12.5	1	1	0.2
不還	5	3			8	33	3.8				20	81	18.1	1	4	0.9
阿那含			1	0.8	2	5	0.6				8	53	11.8	1	2	0.4
應眞	10	10			5	17	2.0				9	12	2.7			
阿羅漢	6		2	1.6	5	113	13.1	1	4	10.5	23	92	20.5	4	62	13.8

四向四果の用語の使い方すべてが宇井伯寿氏の説の通りでないことは、竺法護や求那跋陀羅も「不還」を多数使っていることから明らかである。ただし、支謙よりも後の訳経者なので、支謙の訳語を真似たとも考えられる。「溝港」、「頻来」に関しては、他の訳経者の使用例が非常に少なく支謙独特とも言える。「般泥洹經」を竺法護の訳出とする説（岩松浅夫氏：「涅槃經小本の翻訳者」）に関しては、竺法護が「溝港」という用語を、今回検討対象とした六八經典だけでなく、「出三藏記集」収集の九〇經典全てに使用していない点で問題が残る。

ちなみにさらに後代の鳩摩羅什の訳出經典について調査したところ、訳出四〇經典の中でただ一度だけ「上士得之。一號溝港。二號頻来。三號不還。四號應眞。應眞之道。其心清淨。猶天明珠。」（「大正藏」一卷No.35「佛說海八德經」、819頁 b28～b29）と関連用語をセットで使用している。

支謙の四向四果用語の使い方には特徴がある。この四語をセットで使用する時「溝港」、「頻来」、「不還」、「應眞」系の用語と、「須陀洹」、「斯舍陀」、「阿那含」、「阿羅漢」系の用語を取り混ぜて使用していないことである。表17に支謙の訳出經典から当該用語を使用している經典を取り出し、一覧表にし

訳語からみた「佛般泥洹經」と「般泥洹經」の訳経者（福島）

た。訳語的には「溝港、頻來」は意識であり、「須陀洹、斯陀含」は音訳である。支謙は訳出初期の頃は、意識の「溝港、頻來」を使用していたが、後期になっていくにつれ、經典の訳者間で音訳の「須陀洹、斯陀含」が主流になり、支謙もそれを採用して行ったのではないだろうか。

宇井伯寿氏は、「溝港」を支謙独特の訳語であると言っているが、「大正蔵」収録の經典中、一七經典にこの訳語が使用されており、訳経者は支謙が八經典、残りの九經典は夫々九名の訳経者が充当していた。支謙の独占使用ではないが、半分近くの經典が支謙訳出であり、支謙の特徴的訳語と言える。

支謙の訳出年代が經典に記録として残っていないので詳細は分からないが、支謙は時代と共に訳語を変化させているようである。「出三蔵記集」を調べた限りでは「右三十六部。四十八卷。魏文帝時。支謙以吳主孫權黃武初至至

表17

「歷代三寶記」											
卷	No.	經典名	經典の 大きさ	溝 港	頻 來	不 還	應 眞	須陀 洹	斯陀 含	阿那 含	阿羅 漢
1	20	佛開解梵志阿闍經	1,264	2	2	3	5				
1	87	佛說齋經	101	1	1	1	1				
4	198	佛說義足經	1350	5	2	3	5				
14	582	佛說孫多耶致佛	57	1	1	1					
17	790	佛說李佛	636	2		2					
8	325	大明度佛	2,604	23	18	23					
1	68	佛說賴和羅佛	277					2	1	1	3
3	169	佛說日明菩薩佛	77					1	1		1
12	362	佛說阿弥陀三耶三菩薩樓仏壇過度人道經	1,527					3	5	4	102
4	200	撰集百緣經	4,698					77	30	31	76
17	760	惟日雜難經	402					7	3	3	21
17	767	佛說三品弟子經	62					1	1	1	
1	54	佛說釋摩男本四子經	103			1					2
1	76	梵摩渝經	246			1	1				
3	185	佛說太子瑞應本起經	909								
10	281	佛說菩薩本業經	378			1					
14	474	佛說維摩詰經	1,558				1				
14	493	佛說阿難四事經	96				9				
14	532	私呵昧經	359			1					

訳語からみた「佛般泥洹經」と「般泥洹經」の訳経者（福島）

孫亮建興中所譯出」となっているだけで經典毎の訳出順番は分からない。

支謙の經典訳出時の肩書きを調べてみると、「國居士」と記したものと、「優婆塞」と記したものの二種類がある（表18）。支謙は晩年に優婆塞となつたらしい。「出三藏記集」の中に「後太子登位。隊隱於穹隘山。不交世務。從竺法蘭道人。更練五戒。凡所遊從皆沙門而已。後卒於山中。春秋六十。吳主孫亮。」（出三藏記集傳上卷 表18

第十三、支謙傳第六）とある。

優婆塞になる前の肩書きが「國居士」ではないかと考え、四向

四果の用語と肩書きの間に相関がないか、調べてみた。表18では特に相関があるようには見えないが、常識的には「國居士」を使用している訳経の方が古いのではないだろうか。

	國居士	優婆塞
溝港、頻來、不還、應眞	6	5
須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢	4	1

表19

	支謙		白法祖		竺法護		法顯		求那跋陀羅		鳩摩羅什		玄奘	
調査經典	22		4		68		2		5		39		28	
應眞	17	13.1	0	0.0	12	11.5	0	0.0	0	0.0	3	9.1	1	12.5
阿羅漢	113	86.9	4	100.0	92	88.5	28	100.0	62	100.0	30	90.9	7	87.5

注：用語の左欄出現頻度、右欄比率

表19は、四向四果の用語の中で一般に使用されている「阿羅漢」の用語が訳出者によってどの様に使われたのかを調べてみた。

支謙から玄奘までの六訳経者の使用状況はまったく使用しない例も一部あるが、ほぼ12%程度を「應眞」が各世代とも占めているようだ。全体の印象としては時代が下がると共に「應眞」から「阿羅漢」に代わっているように感じる。

又、「佛般泥洹經」、「般泥洹經」の中で十回も使用された「應眞」の用語が、白法祖訳出といわれる經典群の中では一度も使われていない。

6) 法語

訳語からみた「佛般泥洹經」と「般泥洹經」の訳経者（福島）

法語に関する使用状況を表20に纏めた。法語の使い方は、八正道の部分を除けば、ほぼ兩經典共に似ているようである。

訳経者では白法祖の使用例が偏っている以外は支謙、竺法護共に似たような使い方である。ただ、『般泥洹經』に使用される「八真道」のみ誰も使っていないのは不思議である。

兩經典における、三悪道の表現箇所を詳細に調べてみると表21のようであり、鬼人・蟲蟻・鳥獸の表現がなされて

おり、用語として整理確立がなされていないことが伺われる。

表20

	『佛』	『般』	白法祖		支謙		竺法護	
地獄	6	6	2	5.26	8	0.93	44	0.70
餓鬼	4	1			5	0.58	27	0.43
畜生	5	5	2	5.26	6	0.70	31	0.49
四神足	4	6			4	0.46	15	0.24
五根		7			3	0.35	16	0.25
五力	3	2			3	0.35	16	0.25
五戒		1			8	0.93	11	0.17
七覚志		1						
七覚意					2	0.23	18	0.29
八戒	6				1	0.12		
八型道							4	0.06
八道		2			3	0.35	17	0.27
八真道		3						

表21

佛般泥洹經			般泥洹經		
162	b 17	當斷地獄畜生餓鬼道。	177	b 29	若都欲斷絕地獄畜生餓鬼道者。
165	c 12	心取畜生蟲蟻鳥獸。	181	c 26	心作鬼人畜生地獄。
		心取地獄。			
		心取餓鬼。			
166	b 05	亦見地獄餓鬼畜生善惡所趣。	182	a 10	天上人中地獄畜生鬼人。
167	c 01	地獄禽獸餓鬼道者。	183	a 12	其墮地獄三惡道者。

Ⅶ. 一般的用語の使用状況

「佛般泥洹經」と「般泥洹經」に比較的良く出てくる用語から五〇語を選び出し、訳経者の使用頻度とどの程度合致するかを調べてみた。

訳語からみた「佛般泥洹經」と「般泥洹經」の訳経者（福島）

調査結果を次頁の表22に示す。表22の評価結果を整理した結果を表23に示す。

表23は総合評価の得点が高いほど、その經典の用語の使い方と訳出者の用語の使い方が似ていることを表している。この検討の方法が、果たして妥当かどうか検証してみる。

表23

			佛般泥洹經						般泥洹經					
			白法祖		支謙		竺法護		白法祖		支謙		竺法護	
			回	点	回	点	回	点	回	点	回	点	回	点
評価 ランク	A	3	7	21	11	33	3	9	3	9	12	36	9	27
	B	2	22	44	19	38	16	32	19	38	15	30	19	38
	C	1	0	0	16	16	22	22	0	0	16	16	16	16
	D	0	21		4		9		28		7		6	
合計配点			132		132		132		135		135		135	
総合得点			65		87		63		47		82		81	
総合評価			49		66		48		35		61		60	

注) 総合評価 = 総合得点 / 配合得点 × 100

經典の大きさが1350行程度で支謙と竺法護の訳出に間違いないとされている『仏説義足經』（支謙訳、1350行）と『等集衆得三昧經』（竺法護訳、1375行）を例に取り上げ検討してみる。調査結果を22頁の表24に示す。表24の結果を纏めたものが表25である。単純に総合評価の得点を見る限り、『佛説義足經』は竺法護より支謙が、『等集衆徳

表25

三昧經』は支謙より、竺法護が訳出した確率が高いことになり、事実と一致する。従ってこれを「佛般泥洹經」と「般泥洹經」に当てはめてみると「佛般泥洹經」は支謙の訳出の可能性が高く、「般泥洹經」は支謙と竺法護のどちらともいえそうである。いずれにしても、白法祖がどちらかの經典を訳出した可能性は少ないと言える。

			『佛説義足經』				『等集衆徳三昧經』			
			支謙		竺法護		支謙		竺法護	
			回	点	回	点	回	点	回	点
評価 ランク	A	3	11	33	2	6	9	27	14	42
	B	2	14	28	16	32	14	28	15	30
	C	1	23	23	27	27	23	23	21	21
	D	0	2		5		4			
合計配点			117		117		116		116	
総合得点			84		65		78		93	
総合評価			72		56		67		80	

注) 総合評価 = 総合得点 / 配合得点 × 100

訳語からみた「佛般泥洹經」と「般泥洹經」の訳経者（福島）

表22

『佛般泥洹經』と『般泥洹經』に使用された一般用語と訳経者三名の該用語の使用状況比較

		『佛般泥洹經』								『般泥洹經』								白法祖		支謙		竺法護	
		1,351								1,326								509		11,564		84,313	
		佛	白法祖		支謙		竺法護		般	白法祖		支謙		竺法護		頻度	度数	頻度	度数	頻度	度数		
		頻度	比率	評価	比率	評価	比率	評価	頻度	比率	評価	比率	評価	比率	評価								
1.挨拶	稽首佛足	6	0.0	D	0.3	B	0.2	B	5	0.0	D	0.3	B	0.3	B	0	0.0	14	1.6	79	1.3		
	稽首畢一面座	1	0.0	D	0.0	D	0.0	C	12	0.0	D	0.0	D	0.0	C	0	0.0	0	0.0	1	0.0		
	稽首著佛足	5	0.5	A	0.5	B	0.0	C	0		D		D		C	1	2.6	20	2.3	4	0.1		
	稽首作禮	4	2.0	A	1.3	A	0.0	D	0		D		D		B	3	7.9	45	5.2	0	0.0		
	佛作禮	1	0.0	D	0.1	B	0.0	D	3	0.0	D	0.0	C	0.0	D	0	0.0	1	0.1	0	0.0		
	佛作禮而去	3	0.0	D	0.3	B	0.0	D	0		B		C		B	0	0.0	8	0.9	0	0.0		
	邊	0		B		C		C	4	0.0	D	0.2	B	0.5	B	0	0.0	8	0.9	121	1.9		
	繞	8	1.0	A	0.5	A	0.4	B	3	2.6	B	1.4	A	1.1	A	3	7.9	36	4.2	199	3.2		
2.人名	阿難	178	0.1	B	0.1	C	0.1	C	125	0.1	B	0.1	B	0.1	B	7	18.4	128	14.8	792	12.6		
	賢者阿難	1	5.3	B	0.9	A	2.2	B	32	0.2	B	0.0	C	0.1	C	2	5.3	8	0.9	140	2.2		
3.地名	鷲山	3	0.9	A	0.1	C	0.0	D	3	0.9	A	0.1	C	0.0	D	1	2.6	2	0.2	0	0.0		
	耆闍崛山	0		B		C		C	3	0.0	D	0.2	B	0.1	C	0	0.0	4	0.5	14	0.2		
	王舍	4	0.0	D	0.3	B	0.2	B	0		B		C		C	0	0.0	10	1.2	62	1.0		
	羅閱城	0		B		B		C	1	0.0	D	0.0	D	0.0	C	0	0.0	0	0.0	2	0.0		
	聚	52	0.3	B	0.1	C	0.1	C	4	3.9	B	1.2	A	0.8	A	6	15.8	40	4.6	208	3.3		
	邑	1	0.0	D	1.0	A	1.5	A	15	0.0	D	0.1	C	0.1	B	0	0.0	9	1.0	97	1.5		
	村	0		B		B		C	0		B		B		C	0	0.0	0	0.0	17	0.3		
4.佛、天	佛	515	0.4	B	0.7	A	0.4	B	400	0.5	A	0.9	A	0.5	A	80	210.5	2976	344.8	13773	218.9		
	世尊	22	1.8	A	0.4	B	1.7	A	6	6.6	B	1.4	A	6.1	B	15	39.5	72	8.3	2287	36.3		
	如来	0		D		D		D	7	3.8	B	4.0	B	9.8	B	10	26.3	244	28.3	4308	68.5		
	釈迦文	2	0.0	D	0.6	A	0.5	B	0		B		C		C	0	0.0	10	1.2	57	0.9		
	瞿曇	0		B		D		C	4	0.0	D	1.1	A	0.1	B	0	0.0	38	4.4	32	0.5		
	轉輪（聖）王	0		B		C		C	2	0.0	D	0.4	B	0.7	A	0	0.0	7	0.8	93	1.5		
	飛行皇帝	13	0.0	D	0.0	C	0.0	D	0		B		C		B	0	0.0	4	0.5	0	0.0		

訳語からみた「佛般泥洹經」と「般泥洹經」の訳経者（福島）

5.修行者 四向四果	溝港	17	0.0	D	0.2	B	0.0	D	2	0.0	D	1.8	A	0.0	D	0	0.0	31	3.6	0	0.0
	頻來	2	0.0	D	1.2	A	0.0	C	2	0.0	D	1.2	A	0.0	C	0	0.0	21	2.4	1	0.0
	不還	6	0.0	D	0.6	A	0.2	B	3	0.0	D	1.3	A	0.4	B	0	0.0	33	3.8	81	1.3
	應眞	10	0.0	D	0.2	B	0.0	C	10	0.0	D	0.2	B	0.0	C	0	0.0	17	2.0	12	0.2
	須陀洹	0		B		C		C	0		B		C		C	0	0.0	7	0.8	57	0.9
	斯陀含	0		B		C		C	0		B		C		C	0	0.0	7	0.8	56	0.9
	阿那含	0		B		C		C	0		B		C		C	0	0.0	5	0.6	53	0.8
	阿羅漢	6	1.8	A	2.2	B	0.2	B	0		D		D		C	4	10.5	113	13.1	92	1.5
	優婆塞	10	0.0	D	0.1	B	0.0	C	0		B		C		C	0	0	11	1.3	15	0.2
	優婆夷	2	0.0	D	0.6	A	0.1	B	0		B		C		C	0	0	11	1.3	14	0.2
	清信士	4	0.0	D	0.1	C	0.3	B	9	0.0	D	0.0	C	0.1	B	0	0	3	0.3	77	1.2
	居士	0		B		D		C	6	0.0	D	0.3	B	0.0	C	0	0	17	2.0	18	0.3
	梵志	2	0.0	D	5.0	B	3.5	B	17	0.0	D	0.6	A	0.4	B	0	0	86	10.0	446	7.1
	遊心	2	0.0	D	0.7	A	0.0	D	17	0.0	D	0.1	C	0.0	D	0	0	12	1.4	0	0.0
6.法語	地獄	6	1.8	A	0.6	A	0.6	A	6	1.8	A	0.6	A	0.6	A	4	10.5	31	3.6	245	3.9
	餓鬼	4	0.0	D	0.3	B	0.4	B	1	0.0	D	1.2	A	1.7	A	0	0.0	10	1.2	104	1.7
	畜生	5	2.1	B	0.3	B	0.4	B	5	2.1	B	0.3	B	0.4	B	4	10.5	12	1.4	120	1.9
	修羅	0		B		B		B	0		B		B		B	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	四神足	4	0.0	D	0.1	B	0.3	B	6	0.0	D	0.1	B	0.2	B	0	0.0	5	0.6	81	1.3
	五根	0		B		C		C	2	0.0	D	0.2	B	0.8	A	0	0.0	4	0.5	98	1.6
	五力	0		B		C		C	2	0.0	D	0.3	B	0.7	A	0	0.0	5	0.6	91	1.4
	五戒	0		B		C		C	1	0.0	D	1.4	A	0.3	B	0	0.0	12	1.4	22	0.3
	七覺意	0		B		C		C	2	0.0	D	0.2	B	0.7	A	0	0.0	3	0.3	84	1.3
	八戒	6	0.0	D	0.1	C	0.0	D	0		B		C		B	0	0.0	3	0.3	0	0.0
	八道	0		B		B		C	2	0.0	D	0.0	D	0.3	B	0	0.0	0	0.0	35	0.6
八眞道	0		B		B		B	3	0.0	D	0.0	D	0.0	D	0	0.0	0	0.0	0	0.0	

用語の説明

- a : 頻度 ①当該用語の兩經典（『佛般泥洹經』、『般泥洹經』）での出現回数。
 ②当該用語の各訳出者毎の調査対象經典での出現回数。
 b : 比率 d(度数) / a(頻度) × 100
 c : 評価

	ランク	D	C	B	A	B	C
比率の範囲		b=0	0 < b < 0.1	0.1 = < b < 0.5	0.5 = < b < 2	2 < b < 10	10 < b
「佛」or「般」の頻度 = 0 の時の各訳出者の度数		2 < d	0 < d < 2	0			

- d : 度数 a(頻度) × 1340 (『佛般泥洹經』と『般泥洹經』經典の平均大きさ) / 各訳出者毎の調査対象經典の大きさ
 注) 經典の大きさは便宜上「大正藏」での行数で表示している。

訳語からみた「佛般泥洹經」と「般泥洹經」の訳経者（福島）

表24 「佛說義足經」と「等集衆徳三昧經」に使用された一般用語と訳経者二名の当該用語の使用状況比較

		佛說義足經					等集衆徳三昧經					支謙		竺法護	
		1,350					1,375					11,564		54,313	
		頻度	支謙		竺法護		頻度	支謙		竺法護		頻度	度数	頻度	度数
			比率	評価	比率	評価		比率	評価	比率	評価				
1.挨拶	稽首佛足	0		C		C	2	0.8	B	0.6	A	14	1.6	79	1.3
	稽首畢一面座	0		B		B	0		B		B	0	0.0	1	0.0
	稽首著佛足	4	0.6	A	0.0	C	0		C		C	20	2.3	4	0.1
	稽首作禮	4	1.3	A	0.0	D	0		B		B	45	5.3	0	0.0
	佛作禮	0		B		B	0		C		B	1	0.1	0	0.0
	佛作禮而去	0		C		B	0		C		B	8	0.9	0	0.0
	邊	0		C		C	0		C		C	8	0.9	121	1.9
	繞	8	0.5	A	0.4	B	3	1.4	A	1.1	A	36	4.2	199	3.2
2.人名	阿難	5	3.0	B	2.5	B	11	1.4	A	1.2	A	128	14.9	792	12.7
	賢者阿難	0		B		D	4	0.2	B	0.6	A	8	0.9	140	2.2
3.地名	鶴山	0		C		B	0		C		B	2	0.2	0	0.0
	耆闍崛山	0		C		C	0		C		C	4	0.5	14	0.2
	王舎	5	0.2	B	0.2	B	0		C		C	10	1.2	62	1.0
	羅閱城	0		B		B	0		B		B	0	0.0	2	0.0
	聚	5	0.9	A	0.7	A	3	1.6	A	1.1	A	40	4.7	208	3.3
	邑	0		C		C	3	0.4	B	0.5	A	9	1.1	97	1.6
	村	0		B		C	0		B		C	0	0.0	17	0.3
4.佛、天	佛	256	1.4	A	0.9	A	203	1.7	A	1.1	A	2,976	347.4	13,773	220.5
	世尊	8	1.1	A	4.6	B	68	0.1	B	0.5	A	72	8.4	2,287	36.6
	如来	5	5.7	B	13.8	C	56	0.5	A	1.2	A	244	28.5	4,308	69.0
	釈迦文	0		C		C	0		C		C	10	1.2	57	0.9
	瞿曇	15	0.3	B	0.0	C	0		D		C	38	4.4	32	0.5
	轉輪（聖）王	0		C		C	9	0.1	B	0.2	B	7	0.8	93	1.5
	飛行皇帝	0		C		B	0		C		B	4	0.5	0	0.0

訳語からみた「佛般泥洹經」と「般泥洹經」の訳経者（福島）

5. 修行者 四向四果	溝港	5	0.7	A	0.0	D	0		D		B	31	3.6	0	0.0
	類來	2	1.2	A	0.0	C	0		D		B	21	2.5	1	0.0
	不還	3	1.3	A	0.4	B	1	3.9	C	1.3	A	33	3.9	81	1.3
	應眞	5	0.4	B	0.0	C	0		C		C	17	2.0	12	0.2
	須陀洹	0		C		C	0		C		C	7	0.8	57	0.9
	斯陀含	0		C		C	0		C		C	7	0.8	56	0.9
	阿那含	0		C		C	0		C		C	5	0.6	53	0.8
	阿羅漢	0		D		C	0		C		C	113	13.2	92	1.5
	優婆塞	0		C		C	0		C		C	11	1.3	15	0.2
	優婆夷	0		C		C	0		C		C	11	1.3	14	0.2
	清信士	0		C		C	1	0.4	B	1.2	A	3	0.4	77	1.2
	居士	0		C		C	0		C		C	17	2.0	18	0.3
	梵志	65	0.2	B	0.1	B	17	0.6	A	0.4	B	86	10.0	446	7.1
	逝心	2	0.7	A	0.0	D	3	0.5	A	0.0	B	12	1.4	0	0.0
6. 法語	地獄	0		D		D	3	1.2	A	1.3	A	31	3.6	245	3.9
	餓鬼	0		C		C	3	0.4	B	0.6	A	10	1.2	104	1.7
	畜生	0		C		C	2	0.7	A	1.0	A	12	1.4	120	1.9
	修羅	0		B		B	0		B		B	0	0.0	0	0.0
	四神足	0		C		C	0		C		C	5	0.6	81	1.3
	五根	0		C		C	0		C		C	4	0.5	98	1.6
	五力	0		C		C	0		C		C	5	0.6	91	1.5
	五戒	2	0.7	A	0.2	B	0		C		C	12	1.4	22	0.4
	七覺意	0		C		C	0		C		C	3	0.4	84	1.3
	八戒	0		C		B	0		C		B	3	0.4	0	0.0
	八道	0		B		C	0		B		C	0	0.0	35	0.6
	八眞道	0		B		B	0		B		B	0	0.0	0	0.0

用語の説明

- a : 頻度 ①当該用語の両經典での出現回数。
 ②当該用語の各訳出者毎の調査対象經典での出現回数。
 b : 比率
 d (度数) / a (頻度) × 100
 c : 評価

ランク	D	C	B	A	B	C
比率の範囲	b=0	0<b<0.1	0.1= <b<0.5	0.5= <b<=2	2<b<=10	10<b
「佛」or「般」の頻度=0の時の各訳出者の度数	2<d	0<d<=2	0			

- d : 度数 a (頻度) × 1350 / 各訳出者毎の調査対象經典の大きさ
 注) 經典の大きさは便宜上「大正藏」での行数で表示している。

7. まとめ

訳出時期については、「佛般泥洹經」の方が「般泥洹經」より古く訳出されたことを結論としたい。

訳経者は「佛般泥洹經」、「般泥洹經」共に支謙訳出としたい。

この結論を出した理由は次のことによる。

- 1) 両經典の訳し方が非常に良く似ており、そっくりなところが多い。
- 2) 「佛般泥洹經」の拙い訳し方を後で訂正したと思われるところ（地震の原因等）がある。
- 3) 一般的な用語の使い方が両經典共に支謙の用語の使い方に近い。
- 4) 特別な用語（「鶴山」、「聚・邑」、「世尊・如来」、「溝・港、須陀洹」等）の使い方が両經典共に支謙の使い方に似ている。

以上のことより両經典共に支謙訳と考えるが、ではどうして支謙が両經典を訳出したのであろうか、以下は筆者の推論である。

支謙は訳経者としての初期の頃、小乘涅槃經を手に入れ訳出を行った。しかしインド社会への理解が不足し、訳経自体も正確さに欠けるものであった。支謙は晩年になって、再度別種の小乘涅槃經典を入手する機会があり、再度訳出を試みた、その際に前に訳出した經典の利用できる場所は利用し、間違いを正して新たに「般泥洹經」とした。

中国の仏教社会では当初「佛般泥洹經」と「般泥洹經」は同一のものでどちらも支謙が訳出したと考えられていたが、時代を経るにつれ、同じ經典を同一人物が二度訳出するということが非常に稀であったせいか、「佛般泥洹經」については支謙以外の訳経者が訳出したと考え、ほぼ、時代が同じ、白法祖を当てはめたのであろう。一方「般泥洹經」の方は、初期の頃は両經典共に「大般涅槃經」として支謙訳として知られていたものが、片方が「佛般泥洹經」として白法祖訳出となったことにより、辻褄が合わなくなり失訳扱いになったのではないだろうか。

訳語からみた「佛般泥洹經」と「般泥洹經」の訳経者（福島）

筆者の最終結論は

「佛般泥洹經」、「般泥洹經」共に支謙の訳出である。支謙が入手した原典は時期も内容も違っていた。最初に入手した原典から「佛般泥洹經」を訳出し、かなりの時代がたってから新たに入手した原典を、「佛般泥洹經」をしながら「般泥洹經」として訳出した。両經典ともに最初は「大般涅槃經」として扱われていたが、「歴代三宝紀」が出された597年頃には現在の經典名になり、「佛般泥洹經」は白法祖訳出、『般泥洹經』は失訳となった。

参考

用語の調査に使用した經典 (注) 經典の大きさは「大正藏」の行数で表示

「大正藏」、「出三藏記集」両方に収集					「大正藏」、「出三藏記集」両方に収集				
訳出者	卷	No.	經典名	經典の大きさ(注)	訳出者	卷	No.	經典名	經典の大きさ(注)
支謙	1	54	佛說釋摩男本四子經	103	支謙	14	582	佛說孫多耶致經	57
	1	68	佛說頽和羅經	277		15	632	佛說慧印三昧經	657
	1	76	梵摩渝經	246		16	708	了本生死經	126
	1	87	佛說齋經	101		17	790	佛說李經	128
	3	169	佛說月明菩薩經	77		17	735	佛說四顯經	636
	3	185	佛說太子瑞應本起經	909		合計		經典數	22
	4	198	佛說義足經	1,350				經典の大きさ合計	11,564
	8	225	大明度經	2,604	白法祖	12	330	佛說菩薩修行經	206
	10	281	佛說菩薩本業經	378		14	528	佛說菩薩逝經	88
	12	362	佛說阿彌陀三那三佛薩樓佛檀過度人道經	1,527		17	777	佛說賢者五福德經	26
	14	474	佛說維摩詰經	1,558		合計		經典數	3
	14	493	佛說阿難四事經	96				用語數	320
	14	532	私呵昧經	359		竺法護	2	103	佛說聖法印經
	14	556	佛說七女經	164	2		118	佛說耆掘摩經	168
	14	557	佛說龍女經施	51	2		135	佛說力士移山經	143
	14	559	佛說老女人經	50	3		154	生經卷	3,366
14	581	佛說八師經	110	3	168		佛說太子墓魄經	82	

訳語からみた「佛般泥洹經」と「般泥洹經」の訳経者（福島）

竺法護	3	170	佛說德光太子經	593	竺法護	14	459	佛說文殊悔過經	569
	3	180	佛說過去世佛分衛經	38		14	460	佛說文殊師利淨律經	362
	3	182	佛說鹿母經	327		14	461	佛說文殊師利現實寶藏經	1,205
	3	186	佛說普曜經	4,775		14	477	佛說大方等頂王經	772
	4	199	佛五百弟子自說本起經	1,056		14	481	持人菩薩經	1,478
	8	222	光讚經	6,037		14	496	佛說大業本經迦	133
	9	263	正法華經	6,223		14	513	佛說琉璃王經	187
	9	266	佛說阿惟越致遠經	2,414		14	534	佛說月光童子經	244
	9	274	佛說濟諸方等學經	388		14	558	佛說龍施菩薩本起經	131
	10	285	漸備一切智德經	3,436		14	565	順權方便經	782
	10	288	等目菩薩所問三昧經	1,465		14	567	佛說梵志女首意經	129
	10	291	佛說如來興顯經	2,151		14	569	佛說心明經	77
	10	292	度世品經	3,678		15	585	持心梵天所問經	2,786
	11	315	佛說普門品經	896		15	588	佛說須眞天子經	1,348
	11	317	佛說胞胎經	404		15	589	佛說魔逆經	517
	11	318	文殊師利佛土嚴淨經	1,009		15	598	佛說海龍王經	2,228
	12	323	郁迦羅越問菩薩行經	686		15	623	佛說如來獨證自誓三昧經	188
	12	324	佛說幻土仁賢經	541		15	627	文殊支利普超三昧經	1,897
	12	334	佛說須摩提菩薩經	208		15	635	佛說弘道廣顯三昧經	1,632
	12	337	佛說阿闍王女阿術達菩薩經	490		15	636	無極寶三昧經	954
	12	338	佛說離垢施女經	722		17	736	佛說四自侵經	119
	12	342	佛說離垢施女如幻三昧經	1,700		17	737	所欲致患經	148
	12	345	慧上菩薩問大善權經	857		17	770	佛說四不可得經	126
	12	349	彌勒菩薩所問本願經	227		17	809	佛說孔光佛經	168
	12	378	佛說方等般泥洹經	1,442		17	810	諸佛要集經	1,192
	12	381	等集衆德三昧經	1,375		17	811	佛說決定總持經	246
	12	395	佛說當來變經	56		17	812	菩薩行五十緣身經	161
	13	398	大哀經卷	3,756		17	813	佛說無希望經	577
	13	399	泉女所問經	1,865		17	815	佛昇 利天爲母說法經	1,083
	13	401	佛說離垢施女無言童子經	1,181		17	817	佛說大淨法門經	714
	13	403	阿差末菩薩經卷	2,553					
14	425	賢劫經卷	5,646						
14	435	佛說滅十方冥經	168						
					合計	經典數	68		
						用語數	84,313		